

終章 日本の地誌は何に役立つか

● 1 地誌で日本を視覚的に紹介する

地誌にはたくさんの地図が使われている。それらはいったい何の役に立つのだろうか。

地図はなくても、地域の説明はできる。例えば、「東北地方は本州の北東に位置する。青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島の前県からなる……」というように、文章だけでも説明できる。

その文章が、短くまとまっていれば、地誌というよりも、地名辞典の分野になる。文章が長ければ、読むのが苦痛になる。

地誌の語源の一つは、リージョナル・ジオグラフィーである。地域の (regional)・地理 (geography) である。地理には地図がつき物である。例えば、高校や中学校の地理には地図帳が使われている。地図帳が教科書であることは、国 (文部科学省) によって、きちんと決められている。

すべての分野は、ある目的を達成するために存

在する。その目的は、他の分野では達成されなかったものだ。地図を使うことは、地理の分野の方法であった。地誌は地理の伝統を引き継いでいる。

情報技術が進歩し、膨大なデータを処理するようになると、地図のデザインは統一されてくる。今の地図の多くは、ほとんどがソフトウェアのデフォルトのデザインである。型にはめてつくられた大量生産である。大量生産も大切だが、全員が同じものをつくる必要はない。地図は人に自分の考えを伝える方法である。言葉や音楽と同じように。

今の人たちはとても忙しい。仕事だけでなく、スマートフォンでゲームをしたり、タブレットでユーチューブを見なければいけない。地誌を書く人は、そんな忙しい人たちの目をもらうことができるだろうか。

● 2 日本地誌は日本を学ぶ基礎

日本地誌は多くの人に日本の情報を伝えることができる。その情報は、自然、歴史、文化、経済、産業など幅広い話題をカバーする。人にたとえるならば、話題が豊かで、多くの人と会話ができるタイプである。ジェネラリストである。

大学で地誌を受講する学生は多い。様々な専門分野に基礎的な情報を提供できるためである。国家資格 (教諭免許状) をとるための科目にも指定されている。地誌を通して、自分が住んでいる地域のことを勉強し直すという学生も多い。

東京都立大学の学生でも、伊豆諸島と小笠原諸島の区別がつかない人がいる (その大学は東京都が経営する大学であり、伊豆諸島も小笠原諸島も東京都に含まれる)。しかし、それは当然のことだ。彼らは厳しい受験の競争に勝つために、余分なものを捨ててきたのだ。

地誌を受講する学生のほとんどは、地誌以外の

存在意義となる

それは
である

それはスペシャリスト
ではなく、
ジェネラリスト

主管

からである

分野で卒業論文を書く。それぞれの分野でスペシャリストになる。そして、大学を卒業した後は、無限の価値観がある世の中で、生きていかなければならない。

● 3 地誌は生涯学習に役立つ

定年退職した人たちが大学で地誌を学んでいる。いろいろな仕事をしてきた人たちが、いろいろな理由で学んでいる。例えば、「学生時代に一番好きだったのが地理だったから」「Web ページで旅行記を公開していて、その勉強に」「兄弟で私だけ修士号が無いから」……

学生時代は工学や理学で専門的な科目を学び、社会に出てからは、人のために働いてきた。年齢になってようやく、自分のために勉強する時間ができた。そのような人たちに地誌は人気がある。それぞれの問題意識で身近な地域を研究している。野外で観察したり、聞き取り調査をしたり、文献を読んだり、GIS で地図を製作している (図 2)。地誌を学ぶことは人生の幸せである。

● 4 地誌で地域の魅力を伝える

地誌は地理の伝統を引き継いでいる。地理の本質は、地面の記録である (geo + graph)。伝統的な地理のように、ただただ地面を記録することが、いったい何の役に立つのだろうか。

いつの時代も人は地域の情報を必要としてきた。それが今も地誌がなくなる理由である。日本で最古の地誌書は 8 世紀に編集された風土記だろうか。昔、旅をすることは危険だった。知ら



図 2 東京都立大学生涯学習コースの学生が GIS で製作した地図

ない地域の情報を正しく知ることは、自分の命を守ることだった。

工業化が進んだ今、人は飛行機で移動し、自動車を所有する。地域の情報が命を守るという表現は、国内旅行ではオーバーだ。観光の学部で働いている私は、地誌の力で、地域の魅力をなるべく多くの人に伝えたいと思っている。どのようにして? ヒントは、「どんな音器も音は出るけれども、音楽にしなければ心と共鳴しない」ことだと思う。

● 5 地誌は野外での教育に役立つ

大学では多くの分野が野外実習を行う。ほとんどの分野は、ある目的地を決めて、そこを重点的に説明する。それに対して、地誌の実習では、移動する行程を含めて線的・面的に地域を説明できる。地誌は守備範囲の広い分野である。

私も複数の大学で野外実習を担当した (写真 1)。実習の前には、分厚い地誌書から地図やグラフを選んで、コピーをして、配布資料を作った。説明する内容も、地誌書で勉強した。それが役に立った。

野外に出るのは楽しかった。地誌書にはたくさんのオプションがあり、解釈はオープンだった。本に書かれている内容を野外で確認したり、本に書かれていない新しい発見をしたりした。どちらの場合も、野外でとても大切なものを見つけたような気持ちだった。

どうして野外実習があるのだろうか。学生の頃



写真 1 北海道大学のバス巡検 (2011 年 5 月、サロベツ原野) 昔、大学には野外実習用のバスがあり、いろいろな場所へ行けた。

伝えるのか、その

地域の
で自由であ



図 1 画像製作ソフトウェアの例

Inkscape は地図製作に使えるソフトウェア。無料で使える。地図のデザインを考えるため、昔の地図帳を見るのも良い。例えば、氷見山は (1995) の大判の地図帳。

に野外で先生から聞いたことは、今でもよく覚えている。外の風にあたりながら考えたことは、人の心の深いところに記憶されるのだろう。

●6 地誌は国際化する観光に役立つ

観光について、本書を書いた全員が、観光に関する研究を発表している。ここでは、観光の国際化に関して、私が思い出したことを書く。

私は昔の職場で“Regional geography of Japan”という講義をした。外国からお客さんが来たときに、英語で日本を案内できることが、その講義のねらいだった。私の経験では、外国人の案内を日本人にお願いすると、「英語に自信がないのでムリです」という人が多かったためである。

その講義は、日本人向けの講義だったが、留学生の受講も多かった。彼らは日本に来るのだから、日本のことを知りたいのだ。彼らの素直な好奇心を満たすのに、地誌は役立った。

例えば、パーティーでホタテの寿司が出てきたとき、「これは何ですか」と聞かれる。私は「それはホタテ scallop です」と答える。そしてホタテは北海道で養殖されていることや、中国へ輸出されていることを話す。それをきっかけに話が進んでいく。

●7 防災の教育に役立つ

防災について、日本はいわば災害の百貨店である。図書館に並べられている市町村史（誌）をざっとめくっただけでも、地震、津波、噴火、台風、洪水、地滑り、大火、暴風雪、飢餓などの記録が見つかる。前述の野外実習でも、防災をテーマにすることが多かった。

地誌を読めば、自分もいつか何らかの災害に遭うことが想定できる。しかしコンピュータと違って、人の心は忘れやすい。人生の不愉快なこともたいてい忘れてしまうが、その特性が危険になることもある。

山が大噴火をおこしたり、バケツの底が抜けたような大雨が降るのは、ただの自然である。何億年も前から続くサイクルである。そのサイクルが、地面をつくったり、削ったりした。そこに人

がいなければ災害は発生しない。人が「災害である」と認識することで災害が発生する。人は自然の一部でなく、自然を認識する主体である。比喻を使えば、「われ雨を見る、故にわれ在り」である。

今、ほとんどの人が都市的な生活をしている。仕事も遊びも高度化している。自然をゆっくりと、自分の頭で認識する時間がない。学校の教師が次の世代にうまく伝えられると良いけれど……

●8 地誌でSDGsを理解する

地誌は昔ながらの分野である。地誌には、地名の暗記が多いというイメージがあるので、地誌を捨てる人がある。暗記が問題であるという問題は、教える人も、読む人も、想像力をなるべく使わず、型にはめて考えるようになったためだと思う。例えば、『やませ』がもたらす被害について述べなさい」と問うと、皆よく答えられるが、『やませ』について述べなさい」と問うと、何を答えてよいかわからなくなってしまう。夜の海に放り出されたようになってしまう。

そのような理由で地誌を捨てる人がある一方で、パッチをあてながら地誌を使い続ける人もいる。パッチとは、コンピュータの分野では、バグを修正するコマンドのことである。

パッチをあてながら使い続ける方法の一つに、動態地誌という視点がある。その視点は10年以上前に、本書の初版（菊地、2011）で試みられたので、ここでは割愛する。ここでは地誌を書いた先人の本から考える。

一つは、地誌により、持続可能な開発目標（SDGs）を理解することである。その方法は、飯塚・菊地（2021）の終章で説明される。その説明は未完なので、ここで解釈してみる（表1）。

1つ目の「資源や文化の違いを理解し、公平な社会をつくる」ことについて、「資源」には、石油などの地下資源だけでなく、風や植物などの自然環境も含まれる。「文化」もまた、音楽や絵画だけでなく、人が何かをつくる広い営みのことである。それらは、地域ごとに似たものもあれば、違うものもある。違うものを正しく知ることが、

現在

も

の勉強をあきらめる
課

の勉強をあきらめる

公正な社会をつくる基本である。

2つ目の「他の地域の人々と仲良くつき合う」ことについて、私の経験では、地誌は知らない人と話をするのに役立った。「どこから来たの?」とか、土地の気候とか、パーティーに出てくる食べ物など、そんな小さな話題から何かが始まる。

3つ目の「他の地域の性格を学ぶ」ことで、自分の生きる力を得る」ことについて、私にとって、地誌を書くことは問題が多いけれども楽しみでもある（fun problem）。周りに目を向けると、旅行好きな人は多い。旅行記をWebページで紹介する人もいる。地誌で私たちの話は面白くなる。

4つ目の「地域の良いところを、発信し、後生に伝える」ことについて、何かの良いところを発信し、後生に伝えることは、ほとんどの人の営みに共通する。例えば、周りの研究室をみると、「まちづくり」の人たちは、開発のために良いところを伝える。生態学の人たちは、自然保護のために良いところを伝える。

それに対して、地誌を書く人は、地域の良いところを伝える。地域には、都市も農村も、人も自然も含まれる。書き手も、読者も、中立的に地域を知ることができる。そのために書き手（貴方）は、有能なキュレーターが絵画を説明するように、地域のことを説明する。

●9 地誌を書くための視点「文化層序」

文化層序は、ある大学の地誌学教室を引っ張っ

表1 地誌とSDGsにつながる地誌

地誌の学び	持続可能な開発目標
資源や文化の違いを理解し、公平な社会をつくる。	→ 10. Reduced inequalities
他の地域の人と仲良くつき合う。	→ 17. Partnerships for the goals
他の地域の性格を学ぶことで、自分の生きる力を得る。	→ 4. Quality education
地域の良いところを、発信し、後生に伝える。	→ 11. Sustainable cities and communities

てきた斎藤功が、退職する頃に提唱した考え方である。（斎藤は朝倉書店の『日本の地誌』も執筆）。

文化層序とは、ある時代の植物や花粉が池に堆積して地層をなすように、ある地域に流入した時代の文化はそれが建造物であれ書物であれ文化財であれ、何らかの痕跡を残すと考える。

図3は、文化層序の模式図である。上の部分が今の空間構造である。構造とは、複数のパーツでできた全体である。それが表面である。たいていの人はそれだけを見ている。

その空間構造を縦に切った場合、内面には地層のような構造が見えてくる。それが文化層序である。斎藤はよく「見ようと思えば、見えるんだ」と言っていた。

新しい文化が、古い文化の上に積もっていく。ときに優しく、ときに激しく。そこで貴方が見たものを、正しく書くことが、文化層序である。そ

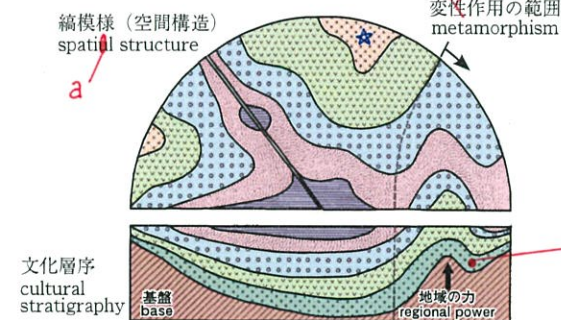


図3 文化層序の模式図

（斎藤 2006）

れは、ただただそこに存在するだけである。小石
や原子核のように。

[仁平尊明]

文 献

飯塚 遼・菊地俊夫（2021）：観光地誌学，188p，二宮書店。

菊地俊夫編（2011）：日本（世界地誌シリーズ1），176p，朝倉書店。

斎藤 功編（2006）：中央日本における盆地の地域性—松本盆地の文化層，268p，古今書院。

氷見山幸夫ほか編（1995）：アトラス 日本列島の環境変化，187p，朝倉書店。